杭州・老虎洞窯出土青瓷の編年について

森 達也

1. はじめに

南宋代（1127～1279 年）の陶瓷生産の頂点に位置づけられるのは、首都・臨安府（現・杭州）に設けられた「官窯」であり、そこでは宮廷の御用品として用いられた上質の青瓷が生産された。

南宋の葉寘が著した『垣齋筆衡』と顧文薦の『負喧雑録』とにある「政和間（『負喧雑録』では「宣政間」）京師自置窯焼造（『負喧雑録』では「自置焼造」）、名曰官窯。中興渡江、有邵成章提挙后苑、号邵局。襲故京遺制、置窯于修内司、造青器、名内窯。澄泥為範、極其精致、油色瑩徹、為世為珍。後郊壇下（『負喧雑録』では「郊下」）別立新窯、（『負喧雑録』では「亦曰官窯」が加わる）比旧窯大不侔矣。」（註 1）という記載では、宋朝が南遷後に、修内司に窯を置いて青瓷生産を行ない、これを「内窯」と呼び、のちに郊壇下に別に「新窯」を立てたことが述べられており、南宋代に新旧二つの官窯が存在したと推定されている。一般的には前者を「修内司官窯」または「内窯」、後者を「郊壇下官窯」または「郊壇官窯」と呼ぶことが多く、両者を総称して「南宋官窯」と呼んでいる。

南宋官窯の窯址は長く所在が明らかでなかったが、1930 年に浄土真宗本願寺派の大谷光瑞師の命を受けた小笠原彰真師が杭州市南部の烏亀山山麓で窯址を発見した。1956 年、1985～86 年に発掘調査が実施され、2 基の小形の龍窯と工房が確認された（註 2）。烏亀山の山頂には南宋代に皇帝が天を祭った郊壇があるため、この窯址は『担斎筆衡』の記載「后郊壇下別立新窯」に合致するという考えが定説になっており、「郊壇下官窯」または「郊壇官窯」と呼ばれている。

「修内司官窯」の窯址に関しては、杭州領事であった米内山庸夫が 1930 年に烏亀山の北方約 2.5km にある鳳凰山の山麓で南宋官窯青瓷と思われる瓷器片や窯道具が散布する遺跡を発見し、「修内司官窯」であるとの説を提示した（註 3）。しかし、そこで得られた瓷器片には南宋官窯青瓷だけでなく白瓷や黒釉瓷などの破片も含まれていたため、この説が大きな支持を得ることはなかった。

1996 年 9 月に鳳凰山と九華山の間の老虎洞と呼ばれる渓谷で山崩れがおこり、多量の南宋官窯青瓷に似た瓷器片や窯道具が発見された。1998 年 5 月から 12 月と 1999 年 10 月から 2001 年 3 月にかけて 2,300 平米にわたる面積の発掘調査が実施され、龍窯 3 基、小形饅頭窯 4 基、工房 10 基、水簸池 4 基、轆轤ピット 12 基、採掘坑 2 基、廃棄土坑 24 基などの遺構と多量の瓷器片、窯道具が確認された。この窯址の調査は、「修内司官窯の発見」と大きく報道されて注目され、中国・国家文物局が選定する「中国重要考古発現」の一つに 1998 年度と 2001 年度の二回にわたって選定された（註 4）。また、2001 年 10 月には発掘調査概報（註 5）と出土遺物の資料集である『杭

州老虎洞窯址瓷器精選』が（註 6）が出版され、その調査成果の一端が示された。これら概報と資料集の出版に併せて 2002 年 11 月に中国・杭州市で開催されたシンポジウム『老虎洞窯址国際学術研討会』では、老虎洞窯址を修内司官窯とする意見が大勢を占めたが、一方で、その断定を危ぶむ意見も出されていた。しかし、2006 年 11 月に南京と杭州で開催された中国古陶瓷学会の研究発表の際に、発掘を担当した杭州市考古所副所長・唐俊傑氏が、老虎洞窯址出土資料の中から遺物整理作業の際に発見された蕩箍（とうこ・轆轤の軸下にはめる陶瓷製のリング状の部品）に「修内司窯置庚子年（一部欠）□□□□□匠師造記」の刻銘が発見されたことを報告した。2008 年には、唐氏はその概要を『文物』誌上で報告している（註 7）。なお、南宋の庚子年は孝宗淳熙七年（1180）と理宗嘉熙四年（1240）の二回あり、この蕩箍の年代は 1180 年の可能性が高いとされている。

唐俊傑氏の報告によって老虎洞窯が修内司窯であったことはほぼ確実視されるようになり、その後の研究も盛んであるが、老虎洞窯址出土資料自体の詳細な分析・研究はまだ充分に進んでいるとはいいがたい状況が続いている。ここでは、老虎洞窯址の既に公表されている資料と研討会の際に観察することができた資料をもとに、その編年と年代についての考察を行なうこととする。

2. 遺物・遺構の状況

『簡報』では、老虎洞窯址の遺構・遺物は 4 時期に区分され、第一期は北宋代、第二期・第三期は南宋代、第四期は元代に位置づけられている。第二期・第三期には南宋官窯タイプの青瓷の生産、第四期には哥窯に近似した青瓷の生産が行われており、第二期が南宋初期、第三期が郊壇下官窯の早期と並行時期、第四期が元時代に比定されている。南宋官窯タイプの青瓷が集中して出土したのは第二期・第三期に位置づけられている 24 基の廃棄土坑で、その多くは土坑内に青瓷片がびっしりと詰まっており、破片の間にはほとんど土が入っていない状態であった。これらの土坑から出土した青瓷は、細片に割れていたが大部分は全形が復元可能で、窯出し後の製品チェックに通らなかった失敗品を意識的に破砕して、土坑の中に廃棄したとものと考えられる。同様の廃棄土坑は、江西省景徳鎮窯の明代官窯など宮廷用の御器が生産されたと推定される窯跡で共通して見られるものである。このような廃棄状態から見て、各土坑から出土した青瓷はほぼ同時に破砕されて埋められた一括性の高い資料と考えられることから、土坑ごとの出土遺物のセットを同時期の製品として編年を組み立てることが可能である。

廃棄土坑から出土した青瓷は、粉青色釉が主で、米黄色釉がそれに次ぐ。胎土は黒胎、灰黒胎が多く、灰白胎もみられる。胎が薄く釉が厚い、「薄胎厚釉」のものが多いが、「厚胎厚釉」や「厚胎薄釉」のものもある。厚釉の釉断面には複数の間層が観察され、多層施釉法（註 8）によることがわかる（図 1）。焼成は饅頭窯によって素焼きしたのちに龍窯で本焼を行なっており、越州窯など素焼きを行なわない江南の伝統的な焼成技法によるのではなく、汝窯など黄河流域の焼成技法の影響を強く受けている。もっとも、本焼に使用された窯は、黄河流域の饅頭窯ではなく龍窯であることから、華北と江南の技術を融合して生み出された焼成技法とすることができよう。なお、『簡報』で報告されている Y1 号龍窯は幅約 2m、長さ 15m で、南宋初期の寺龍口窯の幅約 1.8 m、長さ約 50m という規模と比べてかなり小形である。これは老虎洞窯が大量生産のための窯ではなかったことを物語っている。

『簡報』の第四期に位置づけられ遺物は、廃棄土坑などの遺構に伴うものではなく、トレンチ内や遺跡の表土中からの出土が大部分である。第二・第三期の出土遺物と比べて、胎土は粗く、

器肉が厚く重い。胎土は灰色が主で、次いで黒胎のものが多い。釉には米黄色釉、灰青色釉、月白釉などがある。底部に点状目跡を持つものが多く、支釘トチンには元代に用いられたパスパ文字が印されたものが出土している。

3.廃棄土坑出土遺物の概要

廃棄土坑のうち、出土遺物の状況がある程度明らかにされているのは、『簡報』と『杭州老虎洞窯址瓷器精選』（以下『精選』）で概要が紹介されている5基（H3、H4、H5、H7、H20）と、『精選』で写真のみが提示されている7基（H1、H2、H6、H8、H10、H18、H22）の計12基である。『精選』の遺物写真は遺構ごとに提示されているわけではなく、説明も不十分であるため、ここではまずこれらの公表された資料を遺構ごとに整理し、さらに2002年のシンポジウムで公開された遺物のデータを加えて検討を行なう。

H1 廃棄土坑

『精選』で出土遺物の写真が示されているだけで、詳細は不明である。樽式炉1、鬲式炉2、套盒1が提示されている。

樽式炉（図2）は、三足をもち、胴部外面に3条の突圏線が一組となった突帯を3本巡らす。総釉がけののち底部に蛇目釉剥ぎが施され、この部分に筒状の窯道具（輪トチン）をあてて支えて焼成している。戦国時代から漢代に作られた青銅樽の器形を模倣したものである。

鬲式炉（袴腰香炉）（図3）は、鐔状の口縁、直立する頸部、横に膨らむ胴部、円錐状の三足をもち、胴部側面から足にかけてはヒレ状の装飾がはり付けられている。総釉掛けののち足下端部の釉を剥ぎ取っている。また、この部分に焼成時に足の中の空気を抜く穴が設けられている。器形は、春秋・戦国時代の青銅鬲を模倣している。

套盒（図4）は、同形の器を複数重ね合わせて使用する日本の重箱に似た容器である。総釉掛けののち下端部の釉を剥ぎ取っている。上部にはL字に屈曲した受け部を設けているが、H3とH4廃棄土坑から出土している同形の套盒（図14）よりも受け部の高さが低いことが特徴である。

H2 廃棄土坑

『精選』で出土遺物の写真が示されているだけで、詳細は不明であるが、H3廃棄土坑に隣接しており、出土遺物も共通性が高いことから、H3廃棄土坑と同時期と考えられる。長頸瓶4、梅瓶3、樽式炉2、盞托1が公表されている。

長頸瓶は、高さ35cmほどの大形品（図5）と22cmほどの小形品（図6）があるが、形態はほぼ同じである。口縁はゆるく外反し、胴部はやや下膨れ、高台はやや高く、外傾する。高台端部以外は総釉である。

梅瓶（図7）は高さ30cm前後で、口縁は盤口形で、胴は肩が張って下すぼまりとなる。底部は外底部を削り込んで高台状になっている。総釉で底部下端部のみが露胎となる。

樽式炉（図8）はH1廃棄土坑出土品（図2）とほぼ同形であるが、底部には蛇目釉剥ぎはなく、5点目跡が残る。

盞托（図9）は碗形の受け部と鍔、スカート状に広がる底部をもつ。受け部の底は穴が空けられている。総釉で底部下端部のみが露胎となる。

H3 廃棄土坑

H3 廃棄土坑は、2×1.8mの長方形で、深さは0.45m、1万余りの青瓷片が出土し、器形が復元されたものは 800 点近く、器種は 20 種余りにのぼる。日常生活用具が主で、青銅製礼器を写した器種もある。

現時点で提示されている遺物は、盤口長頸瓶（砧形瓶）5、長頸瓶 5、梅瓶 4、梅瓶蓋 4、觚 3、樽式炉 2、套盒 2、挟層碗 3、盤 7、小皿 1、鉢 2、碗 13、盞托 3、筆架 1 などがある。

盤口長頸瓶（砧形瓶）（図 10）は、口縁は鐔状に水平にひらき、胴部は肩が張り、側面はふくらみを持ちながら下部がややすぼまる。底部は外底部を削り込んで高台状になっている。総釉で底部下端部のみが露胎となる。

長頸瓶、梅瓶、樽式炉は、H2 廃棄土坑出土品（図 5～8）と同形である。

梅瓶蓋は、上面が平坦で、裾がスカート上にひろがる。総釉で、内頂面に 5 点目跡があるもの（図 11）と、裾端部が釉剥ぎされたもの（図 12）の 2 種がある。

觚（図 13）は商・周代に見られる青銅酒器を写したもので、口縁はラッパ状に、裾部はスカート状にひらく。胴部と裾部の四方には刻みの施されたヒレ状の浮文が貼り付けられている。総釉で、裾端部の釉が剥ぎ取られている。

套盒（図 14）は、H1 廃棄土坑出土品（図 4）と基本的な器形は似ているが、上部の受部の L 字形の部分が H1 のものより大きく、体側面の最上部が外側に膨らむ。

挟層碗（図 15）は、中が空洞で底部に穴のあけられた碗形の容器である。12 世紀後半の龍泉窯青瓷にも同形のものがあり（図 16）、空洞部に湯を入れて皿部の上に盛った食物を温めるための容器ともいわれる。総釉掛けののち、リング状の底部の部分の釉をすべて剥ぎ取っている。

盤には大（口径 30cm 前後）（図 17）、中（口径 18 cm前後）（図 18）、小（口径 14 cm前後）（図 19）の 3 種がある。口縁は斜めにひらき、高台は外傾し先端が丸みをおびる。総釉掛けで高台内には 5 点目跡がある。小形盤（図 19）は大型・中形盤より口縁の立ち上がりと体部の膨らみが強い。

小皿（図 20）は小形盤（図 19）とほぼ同形である。

鉢（図 21）は、ボール状で底部にはやや外傾する高台がつく。総釉掛けで高台端部を釉剥ぎする。

碗には、大形碗（図 22・23）と有蓋碗（図 24・25）、高台をもたない小碗（図 26）がある。大形碗は口部が斜めに大きくひらき、底部には外傾する高台がつく。総釉掛けで、高台端部が釉剥ぎされるもの（図 22）と高台内に 5 点目跡があるもの（図 23）の 2 種がある。有蓋碗は、口部が直立し、宝珠形のつまみがつく蓋が伴う。口径 10 cmほどのもの（図 24）と 14 cmほどのもの（図 25）の 2 種がある。前者には斜めにひらく高台がつき、高台内には 5 点目跡がある。後者は短く直立する高台がつき高台端部の釉が剥ぎ取ぎされる。どちらもふたには足がつき、内頂部には 5 点目跡がつく。小碗（図 26）は半球形で、外底部には 5 点目跡がつく。

盞托は H2 廃棄土坑出土品（図 9）と同形のものと、受部に底がつくものとがある（図 27）。

H3 廃棄土坑出土遺物の目跡はすべて 5 点であることが注目すべき点である。また数は少ないが前述した H2 廃棄土坑の出土遺物も、目跡はすべて 5 点である。

H4 廃棄土坑

下蕪形瓶 1、梅瓶蓋 1、套盒 3、蓮弁文盤 1、盤 1、蓮弁文碗 1 が提示されている。

下蕪形瓶（図 28）は、底部にわずかに外傾する高めの高台がつき、側面には 2 箇所の透かし穴があけられる。総釉で高台端部のみ釉剥ぎされる。

梅瓶蓋（図 29）は H3 廃棄土坑出土の裾端部を釉剥ぎしたもの（図 12）と近似するが器高がやや低い。

套盒は H3 廃棄土坑出土品（図 14）と同形である。

蓮弁文盤（図 30）は口縁端部が外反し、外側面には幅の広い鎬蓮弁文が陽刻される。底部には外傾する高台がつき、総釉で高台端部のみ釉剥ぎされる。

盤（図 31）は蓮弁文盤（図 30）とほぼ同形であるが、無文である。

蓮弁文碗（図 32）は、体部は斜めにひらき口縁端部が外反する。外側面には幅の広い鎬蓮弁文が陽刻される。底部には外傾する高台がつき、総釉で高台端部のみ釉剥ぎされる。

H5 廃棄土坑

長頸瓶 1、透かし彫り長頸瓶 1、盤口長頸瓶（砧形瓶）1、樽式炉 1、透かし彫り樽式炉 1、折縁盆 1、洗 1、蓮弁文盤 1 が提示されている。

長頸瓶（図 33）は、H2 廃棄土坑の大形品（図 5）や H3 廃棄土坑出土品とほぼ同形であるが、高台の外傾がやや弱く、直立気味になっている。

透かし彫り長頸瓶（図 34）は、胴部を 2 重構造にして外壁に唐草文の透かし彫りを施している。器形や高台の特徴、施釉方法は長頸瓶（図 33）とほぼ同じである。

盤口長頸瓶（砧形瓶）（図 35）は、H3 廃棄土坑出土品（図 10）と基本的な形態、造形・施釉方法は共通するが、H3 のものに比べて胴部の膨らみが少なく直線的で、肩部の屈曲も強く直角に近い。

樽式炉（図 36）は H1 廃棄土坑出土品（図 2）、H2 廃棄土坑出土品（図 8）、H3 廃棄土坑出土品とほぼ同形であるが、外底面の目跡が 12 点目跡である。

透かし彫り樽式炉（図 37）は樽式炉（図 36）とほぼ同形であるが、胴部を 2 重構造にして外壁に唐草文の透かし彫りを施している。外底面に 12 点目跡がある。

折縁盆（図 38）は高台をもたない平底で、外底面に蛇目釉剥ぎを施している。

洗（図 39）は口縁が直立するコの字形の器形で、外底面に 8 点目跡をもつ。

蓮弁文盤（図 40）は H4 廃棄土坑出土品（図 30）とほぼ同形である。

H6 廃棄土坑

『精選』で樽式炉 1 と折縁盆 1 の写真が提示されているほか、2002 年シンポジウムの際に蓮弁文碗 1 が公開された。

樽式炉（図 41）は H1 廃棄土坑出土品（図 2）とほぼ同形で、外底部に蛇目釉剥ぎが施されている。

折縁盆（図 42）は底部に直立する低い高台をもち、総釉掛けののち高台端部の釉を剥ぎ取っている。

蓮弁文碗は（図 43）は H4 廃棄土坑出土品（図 32）と全体的な器形はよく似ているが、高台が直立して高台の厚さが薄いことが特徴である。

H7 廃棄土坑

盤口長頸瓶（砧形瓶）1、花盆 4、盤 3 が提示されている。

盤口長頸瓶（砧形瓶）（図 44）は H3 廃棄土坑出土品（図 10）と器形、造形・施釉技法が近似するが、口縁の鍔状部分が H3 のもののように水平にひろがるのではなく、内弯しながらわずかに立ち上がっている。

花盆（図 45）は球形の胴部にラッパ状の口縁がつく器形で、口縁端部と胴部に巡らされた 2 条の突帯に波状の押圧文が施されている。底部には外傾する高台がつけられ、内底部には水抜きの穴があけられている。総釉掛けで、高台端部のみ釉剥ぎが施されている。

盤（図 46）は口縁が内弯しながら斜めにひろがり、底部には細くて低い高台がつけられる。総釉掛けで、高台端部のみ釉剥ぎが施されている。

H8 廃棄土坑

長頸瓶 1、折縁盆 1、洗 2、鉢 1、碗 1 が提示されている。

長頸瓶（図 47）は H2 廃棄土坑の小形の長頸瓶とほぼ同形である。

折縁盆（図 51）は H5 廃棄土坑出土品（図 38）と同形で、外底部に蛇目釉剥ぎが施される。

洗（図 48）は H5 廃棄土坑出土品（図 39）と器形は近似しているが、外底部に点状の目跡はなく、蛇目釉剥ぎとなっている。

鉢（図 49）は H2 廃棄土坑出土品（図 21）と体部の器形は近似するが、高台は外傾せず直線的に立ち上がり、外底部に蛇目釉剥ぎを施す。

碗（図 50）は口径 11cm ほどの小形碗で、底部には垂直に立ち上がる短い高台がつけられ、総釉で高台端部のみ釉剥ぎしている。

H10 廃棄土坑

『精選』で鉢 2 の写真が提示されている（図 52）。H8 廃棄土坑出土品（図 49）と同形で、高台内に蛇目釉剥ぎが施されている。

H18 廃棄土坑

『精選』で折縁盆 1 の写真が提示されている（図 53）。器形は H5 廃棄土坑出土品（図 38）や H8 廃棄土坑出土品と同形であるが、外底部に蛇目釉剥ぎでなく 7 点目跡をもつ。

H20 廃棄土坑

長さ 2.2m、幅 1.14m、深さ 0.06～0.15mの長方形を呈する廃棄土坑である。出土遺物は弦文瓶 1、尊式瓶 2、鼎式炉 4、折縁盆 1、碗 1、盞托 1 が提示されている。

弦文瓶（図 54）は口縁が短く外反し、頸部に 3 条、胴肩に 1 条の弦文（突帯）が巡る。底部には外反する高台がつき、総釉で高台端部の釉が剥ぎ取られている。

尊式瓶（図 55）は球形胴の上にラッパ状の口縁、下にはスカート状にひろがる底部がつく。四方には刻み文を施したヒレ状の浮文が貼り付けられる。底部は外底部を削り込んで周囲が高台状になっている。総釉で底部下端部のみが露胎となる。

鼎式炉（図 56）は古代の青銅鼎の器形を写した器種で、口縁に U 字形の耳と、三足の足がつ

く。総釉掛けののち足端部の釉が剥ぎ取られている。足端部には空気抜きの穴もあけられている。胴服部の下には6点目跡があり、足と腹の下にあてたトチンで支えて焼成したと思われる。

折縁盆（図57）はH6廃棄土坑出土品（図42）と近似した器形の高台付の盆である。H6出土品と同様に高台端部の釉が剥ぎ取られるが、外底部には7点目跡があり、高台端部と底部の下に置いたトチンで支えて焼成したと考えられる。

碗（図58）はH8廃棄土坑出土品（図50）と近似している。

盞托（図59）は、構造はH2廃棄土坑（図9）やH3廃棄土坑出土品とよく似ているが、鍔の部分が6弁の輪花となっている。

H22廃棄土坑

長さ1.15m、幅0.85m、深さ0.3mの楕円形の廃棄土坑で、『精選』において盤口長頸瓶（砧形瓶）1、透し彫り長頸瓶1、樽式炉1、鬲式炉2、折縁盆1、洗2の写真が示されている。

盤口長頸瓶（砧形瓶）（図60）はH5廃棄土坑出土品（図35）と近似した形態で、肩の屈曲が鋭く、胴部が直線的である。

透し彫り長頸瓶（図61）はH5廃棄土坑出土品（図36）と同じ構造であるが、透かし彫りの文様は唐草文の上下に蓮弁文帯が配されており、異なっている。

樽式炉（図62）はH2廃棄土坑（図8）やH3廃棄土坑出土品とよく似ているが、胴下面の目跡は5点ではなく6点目跡である。

折縁盆（図63）はH22廃棄土坑出土品（図57）同形であり、底部に7点目跡がある。

洗（図65）は、H5廃棄土坑出土品（図39）とほぼ同形であるが、底部の目跡は8点ではなく、7点目跡である。

H24廃棄土坑

H24廃棄土坑は、『簡報』や『精選』ではまったく遺物が示されていないが、2002年シンポジウムの際に樽式炉1と花盆1を実見した。

樽式炉（図66）はH1廃棄土坑（図2）やH6廃棄土坑出土品（図41）と近似して、外底部に蛇目釉剥ぎが施される、

花盆（図67）は口縁から胴部上半部にかけての破片のみで全形は不明であるが、H7廃棄土坑出土品（図45）と近似している。

4. 器種ごとの分類

まず、同一器種の中で器形や支焼技法の違いが認められるものを取り上げて分類をおこなう。

盤口長頸瓶（砧形瓶）

Ⅰ類：胴部が丸みをもつ　H3、H7廃棄土坑

Ⅰ-a：口縁が鐔状に水平にひろがる　H3廃棄土坑（図10）

Ⅰ-b：口縁が内弯しながらわずかに立ち上がる　H7廃棄土坑（図44）

Ⅱ類：肩の屈曲が直角に近く、胴部が直線的　H5、H22廃棄土坑（図35,60）

Ⅰ類は、河南省清涼寺汝窯の盤口長頸瓶と器形がよく似ており、11世紀末から12世紀初頭の汝窯の器形を忠実に継承していると思われる。ただし、底部の形態が異なり、汝窯は平

底で胡麻目状の5点目跡をもつが、老虎洞のものは高台をもち端部が釉剥ぎされて目跡はない。

Ⅱ類は、13世紀代中葉に位置づけられる陝西・略陽県八渡河や四川・簡陽県東渓園芸場出土の龍泉窯青瓷の盤口長頸瓶（註9）（図68）によく似ている。13世紀初頭以降の龍泉窯青瓷は南宋官窯の器形や焼成技術の影響を強く受けており（註10）、南宋官窯青瓷の編年を考える上で、龍泉窯の年代を参考とすることは有用である。

以上のような他窯の製品との比較から、Ⅰ類の方がⅡ類より古く位置づけられると考えてよいだろう。

樽式炉

Ⅰ類：外底部に5点目跡　　H2、H3廃棄土坑（図8）
Ⅱ類：外底部に6点目跡　　H22廃棄土坑（図62）
Ⅲ類：外底部に12点目跡　　H5廃棄土坑（図36,37）
Ⅳ類：外底部に蛇目釉剥ぎ　　H1、H6、H24廃棄土坑（図2,41,66）

蛇目釉剥ぎをもつⅣ類は最も新しく位置づけられる。南宋官窯のモデルとなった汝窯は、総釉掛けをして胡麻目のような小さな目跡で支焼をおこない、全面が釉に覆われて露胎が見えないことに徹底的にこだわっている。南宋官窯もこのこだわりを引き継いで、汝窯のものよりはやや大きいが点状の目跡で支焼をおこなうものが多い。蛇目釉剥ぎは胎土が大きく露出し、汝窯から引き継いだ南宋官窯の総釉掛けに対するこだわりに反する技法であり、目跡をもつものより時代が下がると考えてよい。なお、龍泉窯では蛇目釉剥ぎは元代中期頃から用いられている（註11）。

Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類の目跡数の差は、時期差を示すものであるか明確でない。ただ、5点目跡のⅠ類が出土したH2とH3廃棄土坑の出土品で点状目跡をもつものはすべて5点目跡である。汝窯青瓷では碗や小形盤は3点目跡、瓶や盤などの底径が大きめの器種では大部分が5点目跡で、最も一般的に用いられた目跡数が5点であった。H2とH3廃棄土坑出土品は汝窯の伝統を最も色濃く残していると考えられ、最も古くに位置づけられる可能性が高い。

鬲式炉

Ⅰ類：腹部下に6点目跡　　H22廃棄土坑（図64）
Ⅱ類：目跡なし、足端部釉剥ぎ　　H1廃棄土坑（図3）

13世紀から14世紀前半に生産された龍泉窯青瓷の鬲式炉は目跡がなく老虎洞のⅡ類と同じく足端部で支焼している。龍泉窯の鬲式炉は南宋官窯の器形に倣ったと考えられることからみて、Ⅱ類が、目跡をもつⅠ類より新しい要素をもっていると考えてよいであろう。

折縁盆（平底）

Ⅰ類：総釉で外底部に7点目跡　　H18廃棄土坑（図53）
Ⅱ類：外底部に蛇目釉剥ぎ　　H5、H8廃棄土坑（図38,51）

樽式炉と同様に、蛇目釉剥ぎのⅡ類の方が時代が下がると考えられる。

折縁盆（高台付）

Ⅰ類：外底部（高台内）に7点目跡、高台端部釉剥ぎ　　H20、H22廃棄土坑（図57,63）
Ⅱ類：外底部（高台内）に目跡なし、高台端部釉剥ぎ　　H6廃棄土坑（図42）

鬲式炉と同様に7点目跡をもつⅠ類が古式と考えられる。

洗

Ⅰ類：総釉で、外底部に7または8点目跡　H5、H22廃棄土坑

Ⅰ-a：7点目跡　H22廃棄土坑（図65）

Ⅰ-b：8点目跡　H5廃棄土坑（図39）

Ⅱ類：外底部に蛇目釉剥ぎ　H8廃棄土坑（図48）

樽式炉・折縁盆（平底）と同様に、蛇目釉剥ぎのⅡ類の方が、時代が下がると考えられる。

鉢

Ⅰ類：外底部（高台内）に5点目跡　H3廃棄土坑（図21）

Ⅱ類：外底部（高台内）に蛇目釉剥ぎ　H10廃棄土坑（図52）

樽式炉・折縁盆（平底）・洗と同様に蛇目釉剥ぎのⅡ類の方が、時代が下がると考えてよいであろう。

大碗

Ⅰ類：高台内に5点目跡　H3廃棄土坑（図23）

Ⅱ類：目跡なし、高台端部釉剥ぎ　H3廃棄土坑（図22）

H3廃棄土坑から出土したほぼ同形の大碗の中に5点目跡をもつⅠ類と目跡なしで高台端部を釉剥ぎするⅡ類が併存しており、

盤（口径20cm前後）

Ⅰ類：総釉、高台内に5点目跡　H3廃棄土坑（図18）

Ⅱ類：目跡なし、高台端部釉剥ぎ　H7廃棄土坑（図46）

大碗と同様にこの段階に2種類の支焼方法が同時におこなわれていたことがわかる。

盞托

Ⅰ類：円形鐔　H2、H3廃棄土坑

Ⅰ-a：受部の底なし　H2、H3廃棄土坑（図9）

Ⅰ-b：受部の底あり　H3廃棄土坑（図27）

Ⅱ類：輪花形鐔　H20廃棄土坑（図59）

Ⅰ類とⅡ類の鍔の形態の差が時期差を示すものであるのか、ただ単に形の異なるタイプなのかは明確でない。

梅瓶蓋

Ⅰ類：内頂部に5点目跡　H3廃棄土坑（図11）

Ⅱ類：裾端部を釉剥ぎ　H3、H4廃棄土坑

Ⅰ-a：器高-高　H3廃棄土坑（図12）

Ⅰ-b：器高-低　H4廃棄土坑（図29）

大碗と同じようにH3廃棄土坑で5点目跡をもつⅠ類と目跡なしで裾端部を釉剥ぎするⅡ類が併存している。

套盒

Ⅰ類：受部高く、体側面の最上部が外側にわずかに膨らむ　H3、H4廃棄土坑（図14）

Ⅱ類：受部低い　H1廃棄土坑（図4）

Ⅰ類の体側面の最上部が外側にわずかに膨らむ特徴は、汝窯の套盒と共通しており（図69）（註12）、汝窯の器形を忠実に受け継いだ古式の様相をもつ可能性が高い。

5. 編年

次に、以上の各器種の分類と廃棄土坑ごとの各類の組成を併せて検討し、時期設定をおこないたい（表１、表2）。

遺構によって出土器種のかたよりがあり、すべての遺構に共通する器種はないため、比較検討はなかなか難しいが、比較的多くの遺構から出土していて、支焼法の変化が顕著である樽式炉に着目して、樽式炉Ⅰ類（5点目跡）が出土したH2とH3廃棄土坑を第1段階、樽式炉Ⅱ類(6点目跡)・Ⅲ類（12点目跡）が出土したH22廃棄土坑とH5廃棄土坑を第2段階、樽式炉Ⅳ類（蛇目釉剥ぎ）が出土したH1・H6・H24廃棄土坑を第3段階とする。

第1段階は、点状の目跡をもつ器種が多く、報告されている目跡積みによる資料はそのすべてが5点目跡である。碗や盤の小皿など碗皿類は多くが総釉掛けで5点目跡をもつが、大碗や有蓋碗では5点目跡のものと高台端部を釉剥ぎするものが共存している。鉢、丸碗、挟層碗、套盒、盞托は高台端部釉剥ぎのみである。盤口長頸瓶（砧形瓶）や長頸瓶などの瓶類も高台端部釉剥ぎである。前述したように、5点目跡を主流とすることは汝窯の遺風を色濃く引き継いでいるということであり、また、碗皿類の一部や瓶類、盞托などが高台端部釉剥ぎをほどこすことも、汝窯と共通している（註13）。

第1段階の盤口長頸瓶（砧形瓶）は、汝窯のものとよく似た、体部に丸みがあるⅠ類であるが、第2段階に位置づけたH22とH5廃棄土坑から出土した盤口長頸瓶（砧形瓶）は、胴部が直線的で新しい様相をもつⅡ類である。

第2段階でも第1段階と同様に外底部に点状目跡をもつ器種が少なくないがH22廃棄土坑出土品では目跡の数は6点または7点で、公開されている資料の中では5点目跡はまったく見られない。H5廃棄土坑では、樽式炉Ⅲ類の12点目跡や洗Ⅰ-a類の8点目跡など、H22よりもさらに目跡数が多くなっている。また、H5廃棄土坑では折縁盆（平底）Ⅱ類のように蛇目釉剥ぎをもつ器種も見られ、次の第3段階で主流となる蛇目釉剥ぎが、すでに第2段階で出現していたことがわかる。以上の点から、H5号廃棄土坑の方がH22廃棄土坑よりも新しい要素が見られ、5点目跡が主流となる第1段階から、第2段階に入ると目跡数が漸移的に増加し、やがて蛇目釉剥ぎが出現するという支焼方法の変遷を窺い知ることができる。

H4、H18、H20廃棄土坑は、時期を判断する特徴的な器種が出土していないが、第1段階と第2段階のどちらかに位置づけられることは間違いない。なお、『簡報』では、H20廃棄土坑をH3と同じ時期に位置付けている。

第3段階に入ると蛇目釉剥ぎが主流となる。蛇目釉剥ぎの樽式炉Ⅳ類が出土したH1、H6、H24廃棄土坑のほかにも、H8廃棄土坑からは蛇目釉剥ぎの折縁盆（平底）Ⅱ類と洗Ⅱ類、鉢Ⅱ類が出土しており、やはり第3段階に位置づけてよいであろう。また、鉢Ⅱ類が2点出土しただけであるがH10廃棄土坑もこの段階であろう。器種ごとに第2段階と比較すると、鬲式炉は第2段階の6点目跡をもつⅠ類から目跡のないⅡ類に変化し、折縁盤（高台付）も7点目跡のⅠ類から高台端部釉剥ぎのⅡ類にかわる。洗は7点または8点目跡のⅠ類から蛇目釉剥ぎのⅡ類となり、全体的に点状目跡から、蛇目釉剥ぎか高台端部釉剥ぎへと変化する。なお、折縁盤（平底）は第2段階のH5廃棄土坑ですでに蛇目釉剥ぎへと変化し、同形態で第3段階へと続く。

このように、第1段階から第3段階にかけて支焼技法は大きく変化したが、各器種の器形的な変化はあまり顕著でない。盤口長頸瓶（砧形瓶）は第1段階と第2段階での器形変化が比較的はっきりしているが、3段階を通じてみられる樽式炉では、支焼方法は大きく変化するものの、器

形的な変化はほとんど見られない。また、洗、鬲式炉、折縁盆など複数の段階にまたがる器種でも器形変化はほとんどない。3 段階にまたがって出土している長頸瓶などは、支焼方法も器形もほとんど変化していない。各段階の年代位置づけについては後述するが、第 1 段階から第 3 段階は少なくとも 1 世紀前後の長期間にわたる可能性があり、通常の窯業生産であればもっと大きな器形変化が認められるものである。器形変化が乏しいということは老虎洞窯の大きな特徴として挙げてよいであろう。

概報などで断片的に報告された資料を基にして出土状況の全様が明らかでないため、各器種の消長については明確にしがたいが、第 1 段階に見られる外反高台をもつ直口の盤（図 18～20）が、第 2 段階と第 3 段階には見られないことは注目すべきで点ある。このタイプの盤は汝窯の遺風を色濃く残しているが、もしこの器種が第 2 段階以降には生産されていないのであれば、汝窯の遺風が時代を経るにしたがって薄れていったことを示していると考えられるのである。

さて、現時点で報告されている資料では第 3 段階で点状目跡による支焼法が消滅するようにみえるが、ここでさらに注意すべき点は、哥窯に近似した青瓷が生産された、『簡報』でいう第四期（元代）、つまり筆者が第 3 段階とした時期の次の段階（以下、「第 4 段階」とする）には、点状目跡をもつ青瓷（図 71）や支釘トチンがかなり出土していることである。つまり、点状目跡による支焼法は第 3 段階で完全に消滅するのではなく、第 4 段階にまで確実に引き継がれているのである。第 4 段階はパスパ文字が印された支釘トチン（図 70）があることから、明らかに元代に位置づけられる。この段階には釉下に鉄絵で「官窰」の文字を書いた碗底部の破片（図 69）があり、元代に南宋官窯の様式を引き継いだ青瓷をこの地で生産し、その製品が「官窰」という名で流通していたことを物語っている。

第 4 段階の製品には、南宋官窯に似た粉青色青瓷のほかに、伝世・哥窯に似た貫入の目立つ灰青色釉の青瓷やオリーブグリーンの青瓷などがあり、器壁の厚い製品が目立つ。不思議なことに、公開されている瓷片の中には蛇目釉剥ぎのほどこされたものは見られず、点状目跡や高台端部釉剥ぎの製品が大部分である。第 3 段階に消滅に向かった点状目跡が第 4 段階に再び盛んとなるという回帰ともいえる現象がみられるわけであるが、想像をたくましくすれば、第 3 段階に支焼技法は点状目跡から蛇目釉剥へと一旦移行したが、元代（第 4 段階）に入って倣南宋官窯青瓷を生産する中で、より南宋官窯らしい青瓷を志向して、南宋官窯の最大の特徴ともいえる点状目跡を復活させと考えることができる。なお、第 4 段階の老虎洞窯が元朝の「官窯」として位置づけられていたかどうかは記録がまったく残されていない。その製品が日本向けの貿易船である韓国・新安沈船（1323 年沈没）に積み込まれていたことや（図 74）（註 14）、「官窯」と記された青瓷が上質製品とは思えない状況などから見て、「南宋官窯」の遺風を引き継いではいるが、朝廷用の礼器を主に生産した「南宋官窯」とは性格を異にした「官窯」であったのだろう。

さて、次に各段階の年代的な位置づけを考えてみたい。紀年資料や年代の明らかな墳墓などからの出土資料があるわけではないので、年代決定は簡単ではない。老虎洞窯の年代を考察するために南宋官窯や修内司に関する文献資料を引用するのが一般的であるが、ここでは、文献資料を参考にしながらも、年代の明らかな他窯の製品との比較を中心に年代推定を試みる。

第 1 段階は、前述したように汝窯の影響を色濃く残している。盤口長頸瓶、盤類、樽式炉、蓋托、梅瓶、套盒など多くの器種が汝窯の器形を踏襲している。ただ、盤口長頸瓶の底部は汝窯のものが平底に 5 点目跡をもつのに対して、端部が釉剥ぎされる高台をもち、外見はそっくりであるが細部には相違点も見られる。汝窯青瓷の生産年代は諸説あるが、遅くとも開封が金軍におと

されて北宋朝が滅亡した靖康二年（1127 年）には確実に生産を停止したと考えられる。その後、南宋朝が杭州に臨安府を設けたのが紹興二年（1132 年）、宋金間の講和成立と杭州への正式遷都が行なわれたのが紹興八年（1138 年）で、杭州で官窯青瓷の生産が可能となるのはそれ以降と考えられる。窯址出土遺物の分析から第 1 段階の生産開始年代を正確に示すことは困難であるが、汝窯の器形、釉色をかなり正確に引き継いでいることから見て、汝窯の生産停止からあまり時を経ていない 12 世紀半ば頃には生産を開始したと推定できる。

修内司官窯の開窯時期について、文献を中心とした研究では多くの説が示されている。代表的なものとして、杭州に臨安府が設けられた紹興二年（1132 年）を上限、郊壇が築かれた紹興十三年（1143 年）を下限とする説（註 15、礼器局が設けられた紹興十五年（1145 年）前後とする説（註 16）、紹興十九年（1149 年）以前には宮廷用の陶瓷祭器の生産が、越州、平江府、臨安府などに命じられていることから、官窯の成立は紹興二十年（1150 年）以降とする説（註 17）、老虎洞窯址で最も早い段階に位置づけられる H3 廃棄土坑から出土した青瓷に刻された「戊」字銘の干支を、紹興二十四年（1154 年）の「甲戌」年として、この年代を修内司官窯の成立年代と考える説（註 18）などがあるが、現時点では、紹興二十年（1150 年）から『垣齋筆衡』『負暄雑録』の記載にある「邵局」の下限年代である紹興三十二年（1162 年）（註 19）の間と考えておくのが最も適切であろう。

第 2 段階は、胴部が直線化した盤口長頸瓶Ⅱ類の特徴と前述した 13 世紀中頃の龍泉窯青瓷の盤口長頸瓶（四川・簡陽県東渓園芸場出土品）の器形（図 68）の共通性からみて 13 世紀前半を中心とした年代が想定される。上限は 12 世紀代にさかのぼる可能性もある。

蛇目釉剥ぎが主流となる第 3 段階については、南宋官窯の影響を強く受けた龍泉窯で、蛇目釉剥ぎが元代中期の 14 世紀になってから主流となることから考えると（註 20）、それよりもやや前の 13 世紀代後半頃の年代が推定できる。第 3 段階の下限は、1323 年に沈没した韓国・新安沖沈船の引き揚げ遺物の中に、第 4 段階の哥窯風の青瓷（図 73）と近似した資料があることから（図 74）（註 14）、それより前の 14 世紀初頭か 13 世紀末と推定できる。もし第 3 段階の下限が 13 世紀末まで上がるとすれば、その上限は 13 世紀中頃か、13 世紀後半の早い段階になるだろう。

第 4 段階の上限は、前述した新安沈船の年代から 14 世紀初頭頃、下限は出土している馬上杯（図 75）の杯下半部が大きく膨れ口縁の外反がゆるやかな器形が、龍泉窯青瓷や景徳鎮窯白磁の 14 世紀中頃のものと近い（註 21）ことから、14 世紀中頃か 14 世紀後半に入った頃と考えられる。

以上をもう一度まとめると、第 1 段階は 12 世紀中頃から後半、第 2 段階は 12 世紀末または 13 世紀初頭から 13 世紀中頃前後、第 3 段階は 13 世紀中頃から 13 世紀末頃、第 4 段階は 14 世紀初頭頃から 14 世紀中頃過ぎといった年代観となる。南宋前期の第 1 段階から南宋中・後期の第 2 段階を経て、第 3 段階は南宋末から元代初期にまたがり、第 4 段階は元代中期・後期にまで到る。つまり南宋代から元代のほぼ全時期にわたる長期間の生産が続けられた可能性もあると推定されるのである。ただし、第 2 期と第 3 期の年代は、龍泉窯の編年を傍証とした不確かなものであり、もう少し時代が遡る可能性も充分に考えられる。

なお、修内司官窯は、郊壇下官窯が設けられた際に生産を停止したという説（註 22）や、両者がしばらく共存し、修内司官窯は 13 世紀初頭または前半（註 23）に操業を停止したという説が示されている。確かに、第 3 期と第 4 期の青瓷の特徴はかなり異なっており、両期の製品には質的な隔絶が認められる。この隔絶を、青瓷生産の中断と考えることもできるが、南宋朝の滅亡によって官窯としての性格が変化し、製品の質が急激に変化したと解釈することも可能である。修

内司官窯は郊壇下官窯よりも先に生産を停止したと考えるのが一般的であるが、老虎洞窯の第 3 段階には、前述したように蛇目釉剥ぎによる支焼方法が主流となっている。しかし、郊壇下官窯の報告で示された出土品には、蛇目釉剥ぎの資料は見られず、老虎洞窯の第 1 段階と第 2 段階の出土品と類似する資料が主となっている。このような状況から見て、修内司官窯は郊壇下官窯よりも後まで生産を続けていた可能性も決して低くないと考えられる。筆者は、元代にこの地で「官窯」銘の青瓷など南宋官窯の雰囲気を引き継いだ青瓷が生産されていたことや、4 期に区分される編年の状況からから見て、南宋前期から元までの継続的な操業の可能性もあると考えている。ただし、秦大樹氏が指摘しているように、この窯は常時操業していたのではなく、朝廷からの下命があった際のみに青瓷生産をおこなった可能性があり（註 24)、生産停止を繰り返しながら断続的に生産を続けたとも考えられる。

6. おわりに

本論考は『簡報』と『精選』で公表された資料、および 2002 年の杭州でのシンポジウムの際に筆者が実見した資料に基づいて老虎洞窯出土遺物を分類・編年したもので、現時点で公表されている断片的な資料によるため不十分なものといわざるを得ない。特に、各廃棄土坑から出土した遺物の全容や器種構成が報告されていないため、各器種の器形や技法の変遷や器種の消長を明確に示すことはできなかった。しかし、支焼技法の変遷や器形変化の大きな流れはつかみ得たと考えている。各段階の年代位置づけについては、現時点では傍証的な材料しかないため、今後さらに検討する必要がある。

発掘調査以後、老虎洞窯は修内司官窯ではないとの説も出されたことがあるが（註 25)、前述した「修内司窯」銘の資料が報告されたことにより、修内司官窯であることが確認された。南宋皇宮の禁苑という立地、汝窯の遺風を色濃く引き継いだ器種や器形、第 1 段階から第 3 段階まで長期にわたる生産が行なわれながら大部分の器種の器形がほとんど変化しないことに窺われる伝統への固執性、失敗品を意識的に破砕して一括して埋める廃棄土坑などからみても、官窯であることは間違いない。ただし、修内司官窯（または内窯）が老虎洞窯に限定されるのか、周辺にも広がっているのかは今後の大きな課題である。

註

1 陶宗儀（元)『南村輟耕録』巻二十九「窯器」の『垣齋筆衡』の引用に基づく。(『輟耕録』世界書局（台湾） 1972 年,446～447 頁。)

2 中国社会科学院考古研究所ほか『南宋官窯』中国大百科全書出版社 1996 年。

3 米内山庸夫「南宋官窯の研究 1～29」『日本美術工芸』159～196 1952～55 年。
米内山庸夫「南宋官窯の発見」『世界陶磁全集』10 河出書房 1956 年 280 頁。

4 国家文物局編『1998 中国重要考古発現』文物出版社 1999 年 97～101 頁、国家文物局編『2001 中国重要考古発現』文物出版社 2002 年 127～132 頁)。

5 杭州市考古研究所「杭州老虎洞南宋官窯」『文物』2002-10 4～31 頁。

6 杜正賢 主編『杭州老虎洞窯址瓷器精選』文物出版社 2002 年。

7 唐俊杰「関于修内司官窯的幾個問題」『文物』2008 年 12 期 文物出版社 61～68 頁。

8 南宋官窯青瓷や龍泉窯青瓷で、釉の断面に複数の層が見られることがあり、釉を複数回かけて釉層を厚くする技法が用いられたと考えられる。単に釉薬を厚くかけただけでは、窯の中で焼成する際に流れてしまうため、施釉には

特殊な技法が用いられていると推定される。具体的な施釉方法は、胎土を1000度以下の低温で素焼きし、その上に一層釉をかけるごとに再度低温焼成して釉薬を固め、その作業を複数行なった後に最後の釉薬をかけて高温で焼成するという説と、素焼きした素地の上に一層ごとに成分の異なる釉を複数回かけて一度に高温で焼き上げるという説があり、どちらが正しいかまだ明らかではない。

9　唐金裕「陝西省略陽県出土的宋瓷」『文物』1976-11　84・85頁、図版陸-1。
　四川省文物管理委員会「四川省簡陽県東渓園芸場元墓」『文物』1987-2　70～87頁、71頁：図3-4，72頁：図5。
　森達也「宋・元代竜泉窯青磁の編年的研究」『東洋陶磁』VOL.29　東洋陶磁学会2000年3月　77～103頁。

10　森達也「アジアの海を渡った龍泉青磁」『九大アジア叢書　モノから見た海域アジア史』四日市康博編　九州大学出版会　2008年。

11　森達也「宋・元代竜泉窯青磁の編年的研究」『東洋陶磁』VOL.29　東洋陶磁学会2000年3月　85頁　下段6～24行目。

12　係新民　郭木森『汝窯瓷　鑑定與鑑賞』江西美術出版社2005年　彩図34。

13　河南省文物考古研究所『宝豊清涼寺汝窯』大象出版社　2008年。

14　『新安海底遺物　総合篇』韓国・文化広報部、文化財管理局　1988年　図169.170。

15　李輝柄「修内司窯的正名及相関問題」」『故宮博物院院刊』1996年第1期。

16　李民挙「宋官窯論稿」『文物』1994年　第8期　47～51頁。

17　汪慶正「老虎洞南宋修内司官窯遺址的重要発現及其相関諸問題」『上海博物館　集刊』第8期　368～380。

18　鄧禾穎　唐俊杰『南宋史研究叢書　南宋官窯』2008年　60頁。

19　李民挙氏の説では『垣齋筆衡』『負暄雑録』にある「中興渡江、有邵成章提挙后苑、号邵局。襲故京遺制、置窯于修内司、造青器、名内窯。」の「邵成章」は「邵諤」の誤記で、「邵諤」の罷免された紹興三十二年（1162年）が邵局の下限と考えられる。
　李民挙「宋官窯論稿」『文物』1994年　第8期　49頁。

20　森達也「宋・元代竜泉窯青磁の編年的研究」『東洋陶磁』VOL.29 東洋陶磁学会2000年 85頁下段6～24行目。

21　森達也「宋・元代窖蔵出土陶瓷と竜泉窯青瓷の編年観について」『貿易陶磁研究No.21』日本貿易陶磁研究会　2001年9月　36頁2・3行目。

22　李輝柄「修内司窯的正名及相関問題」」『故宮博物院院刊』1996年第1期

23　唐俊杰「南宋郊壇下官窯與老虎洞宋官的比較研究」『南宋官窯文集』文物出版社　2004年，195頁。
　李喜寛「有関南宋后期官窯的幾個問題」『故宮博物院院刊』2009年第3期　6～23頁。
　秦大樹「宋代官窯的主要特点－兼談元汝州青瓷器」『文物』2009年12期　67頁。

24　秦大樹「宋代官窯的主要特点－兼談元汝州青瓷器」『文物』2009年12期　67頁。

25　張玉藍「関于老虎洞窯的幾個問題」『東方博物』第14輯　2005年　93～99頁　ほか。

その他参考文献

杜正賢「杭州老虎洞南宋官窯窯址的考古学研究」『故宮博物院院刊』2002年第5期　1～7頁。
杜正賢　周少華『名窯名瓷名家鑑賞叢書　南宋官窯』江西美術出版社　2003年。
秦大樹　杜正賢主編『南宋官窯與哥窯　杭州南宋官窯老虎洞窯址国際学術研討会論文集』浙江大学出版社　2004年。
杭州南宋官窯博物館『南宋官窯文集』文物出版社　2004年。
王光尭「宋代官窯制度初探」『文物』2005年5期　文物出版社　74～79頁。
唐俊杰「祭器、礼器、“邵局”－関于南宋官窯的幾個問題」『故宮博物院院刊』2006年6期　45～60頁。
鄧禾穎主編『南宋官窯』浙江撮影出版社　2009年

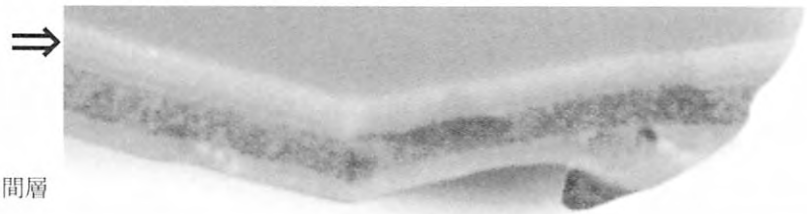


図1 釉断面の間層

H1廃棄土坑

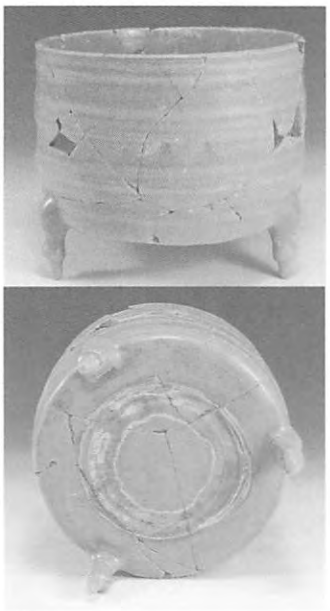


図2

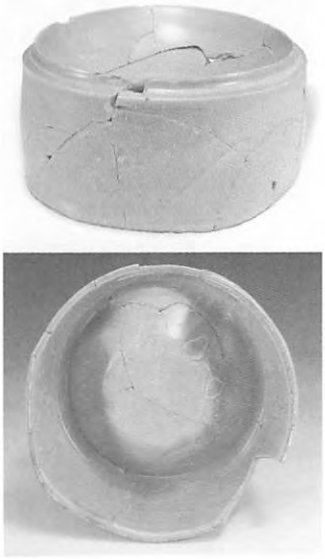


図4

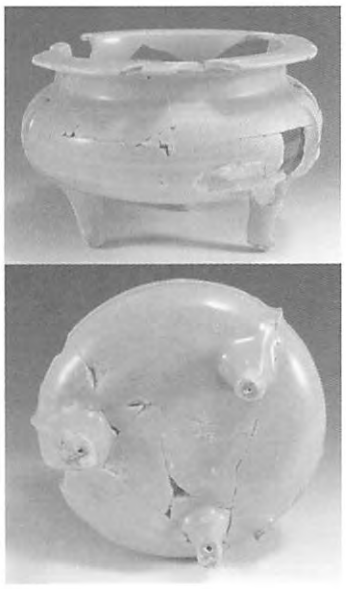


図3

H2廃棄土坑

図5

図6

図7

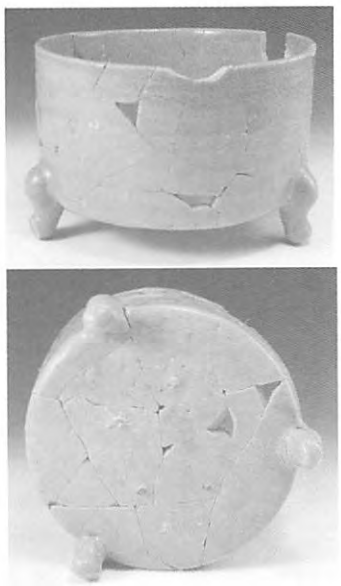


図8

図9

H3廃棄土坑①

図10

図11

図12

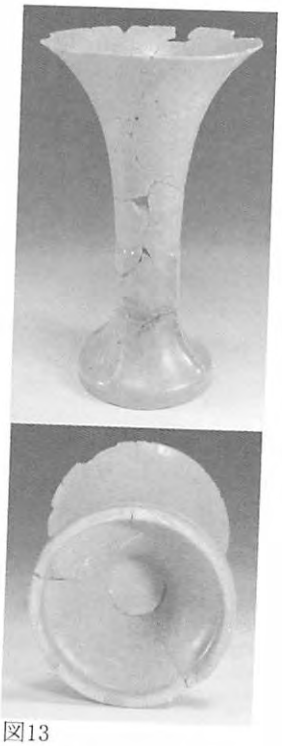


図13

図15

図14

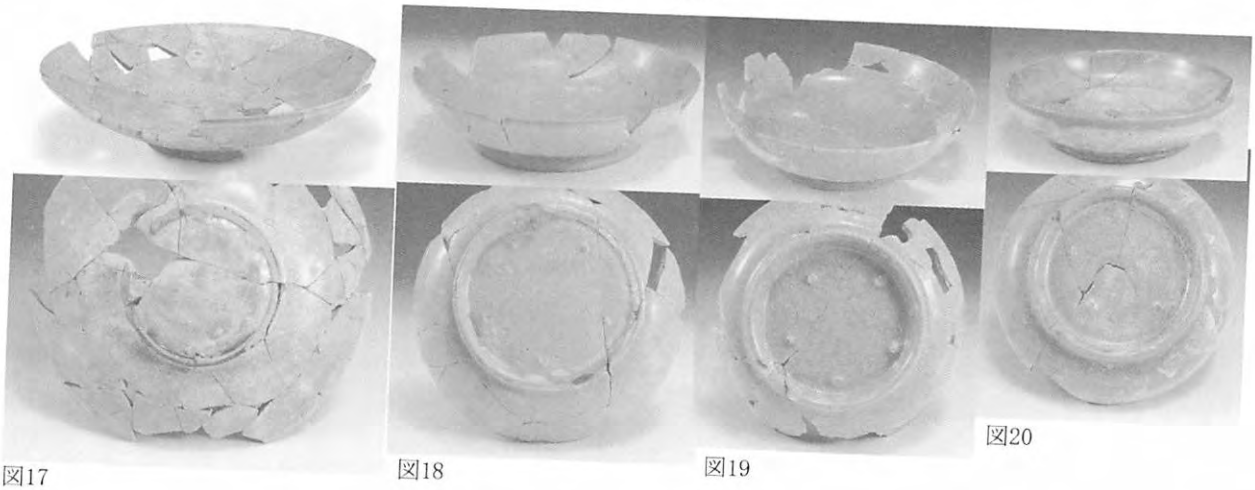


図17　図18　図19　図20

図21

図22

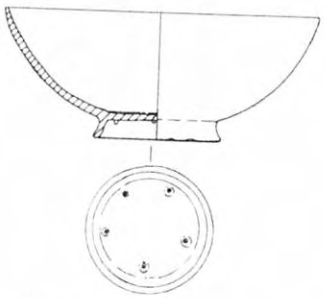


図23

H3廃棄土坑②

図24

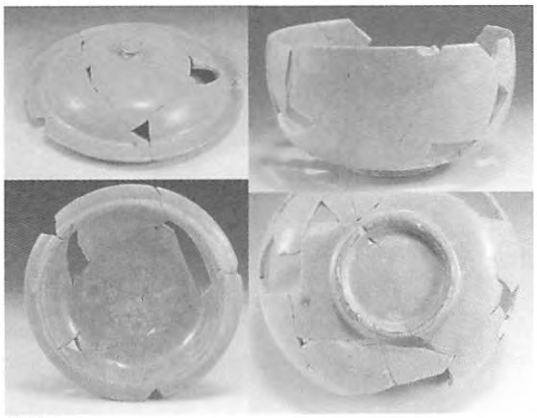


図25

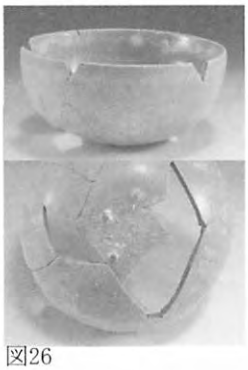
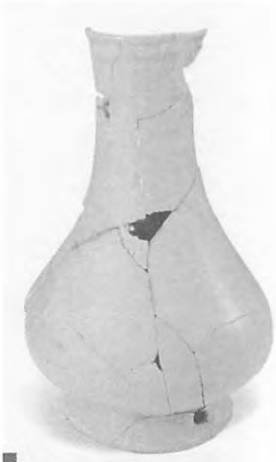


図26

図27

H4廃棄土坑



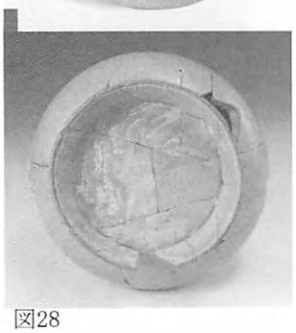


図28

図29

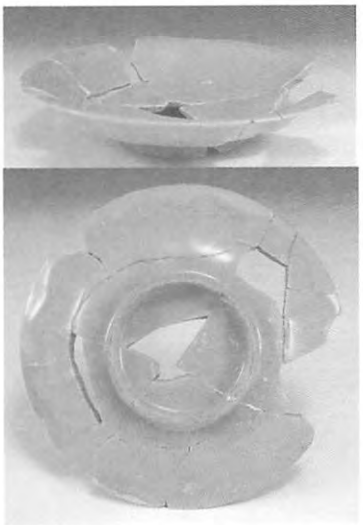


図30

図32

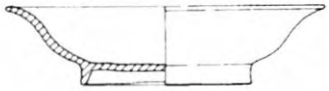


図31

H5廃棄土坑

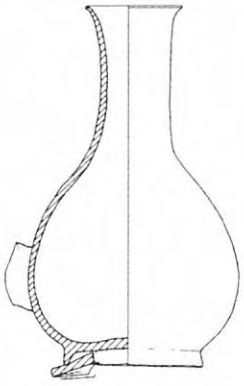


図33

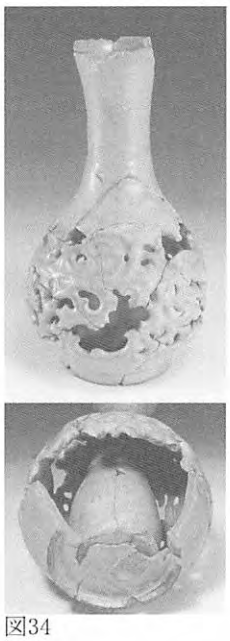


図34

図35

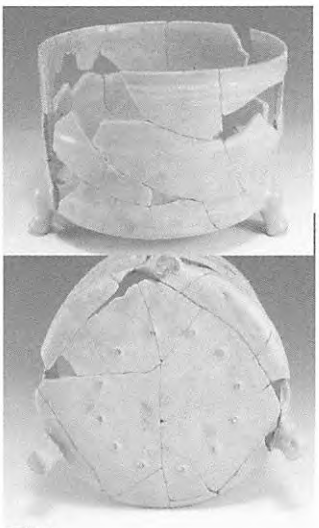


図36

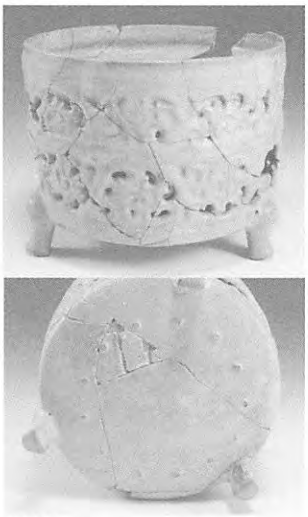


図37

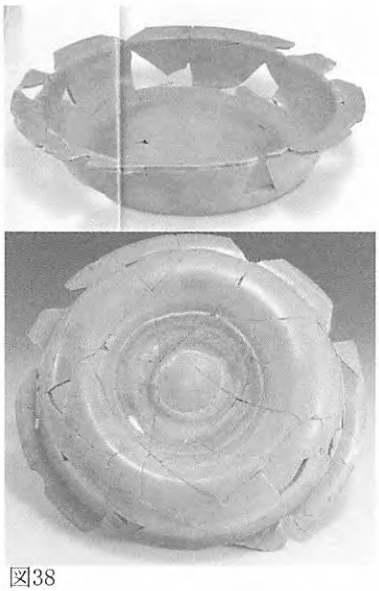


図38

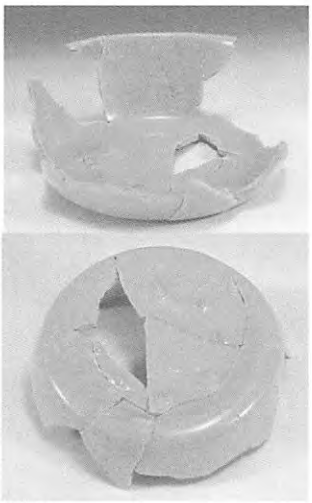


図39

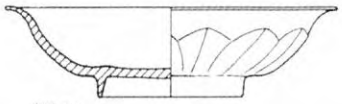


図40

H6廃棄土坑

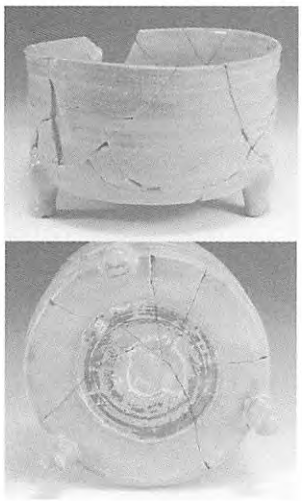


図41

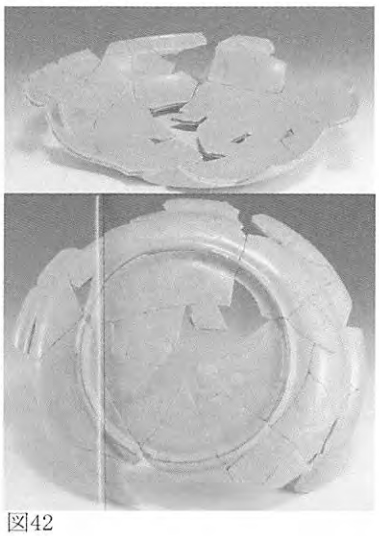


図42

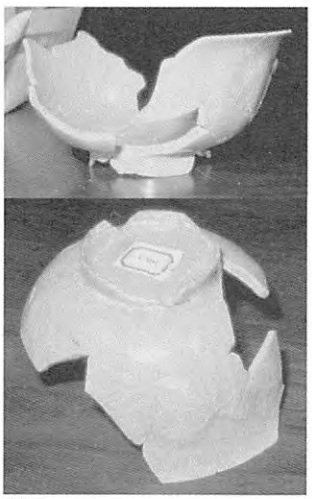


図43

H7廃棄土坑

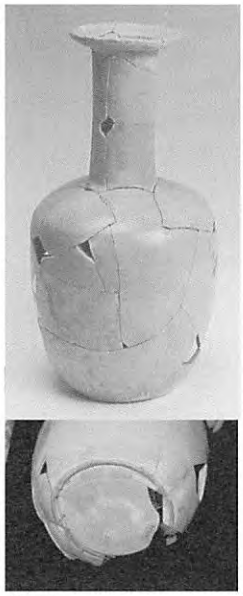


図44

図45

図46

H8廃棄土坑

図47

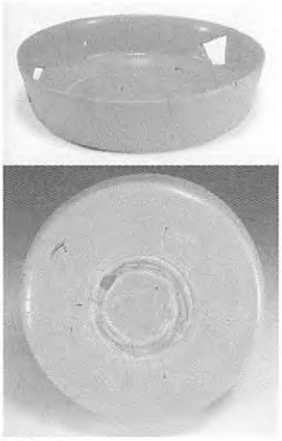


図48

図49

図50

図51

H10廃棄土坑

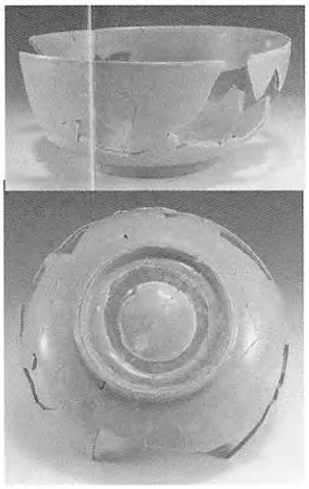


図52

H18廃棄土坑

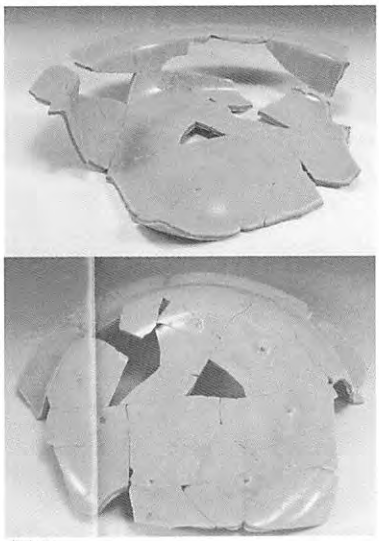


図53

H20廃棄土坑

図54

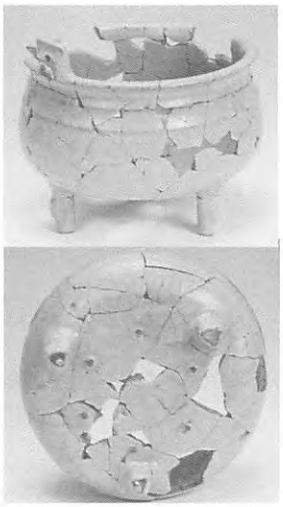


図56

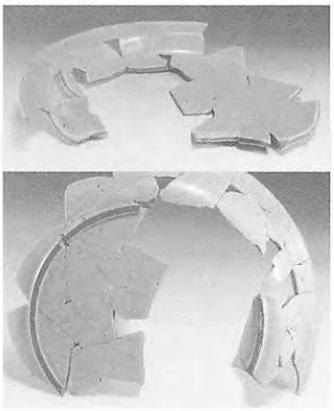


図57

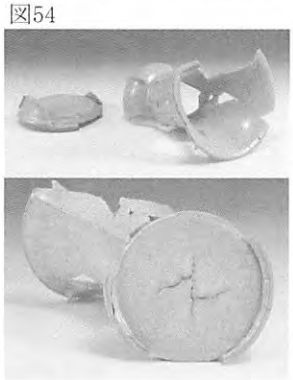


図55

図58

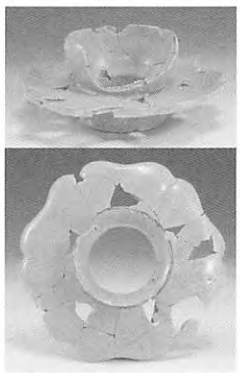


図59

H22廃棄土坑

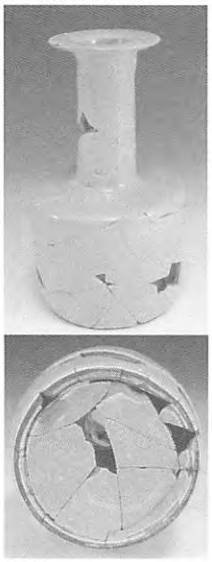


図60

図61

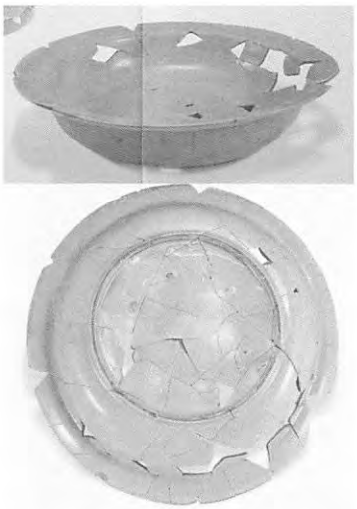


図63

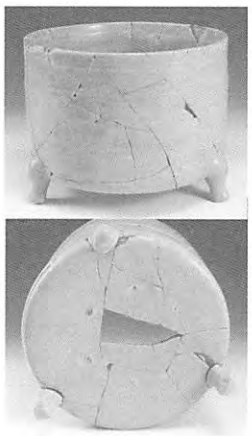


図62

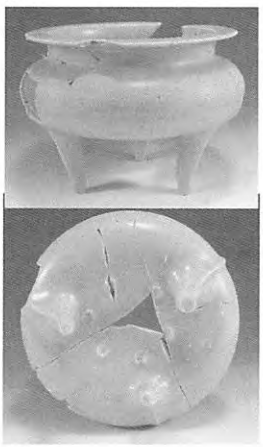


図64

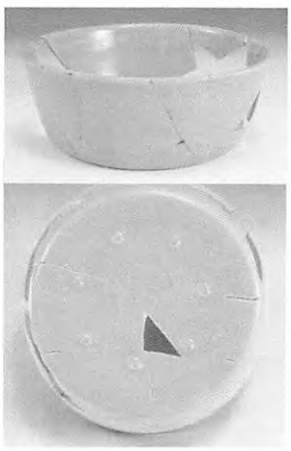


図65

H24廃棄土坑

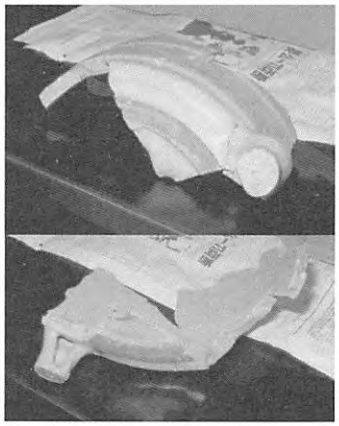


図66

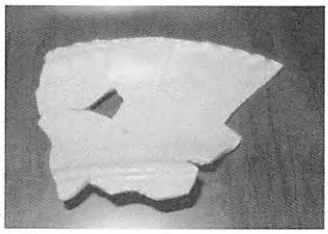


図67

図68　略陽県八渡河出土龍泉青瓷

図69　汝窯の套盒

図70　パスパ文字が印された支釘トチン

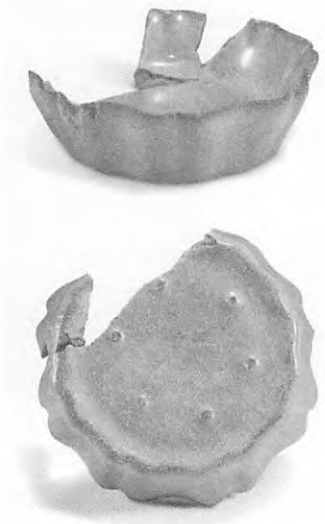


図71　老虎洞窯址・元代青瓷

図72「官窯」銘青瓷碗底部
（元代）

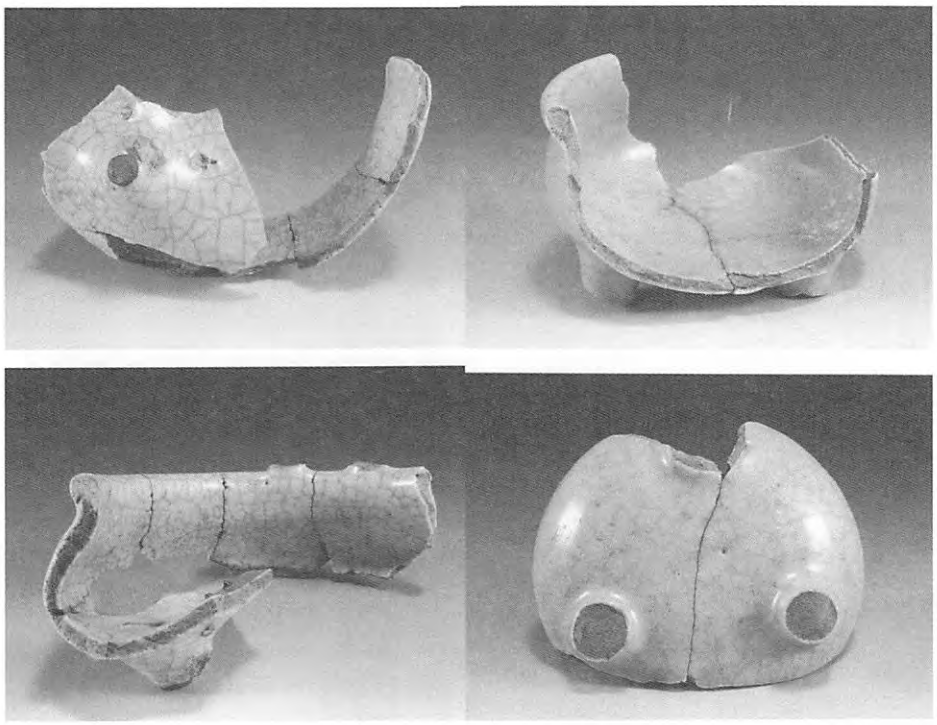


図73 老虎洞窯址出土哥窯風青瓷（元代）

図74　韓国新安沈船の官窯風青瓷

図75　老虎洞窯址出土青瓷馬上杯（元代）

	器種	樽式炉・透かし彫り樽式炉				盤口長頸瓶		鬲式炉		折縁盆（平底）		折縁盆（高台付）		洗			鉢		盤（径18-20）		大碗		盞托	
	特徴	Ⅰ類：外底部5点目跡	Ⅱ類：外底部6点目跡	Ⅲ類：外底部12点目跡	Ⅳ類：蛇目釉剥	Ⅰ類：体部膨み	Ⅱ類：体部直線	Ⅰ類：外底6点目跡	Ⅱ類：目跡なし脚端釉剥	Ⅰ類：外底7点目跡	Ⅱ類：外底蛇目釉剥	Ⅰ類：外底7-8点目跡	Ⅱ類：目跡なし、高台端釉剥	Ⅰa類：外底7点目跡	Ⅰb類：外底8点目跡	Ⅱ類：外底蛇目釉剥	Ⅰ類：高台端部釉剥	Ⅱ類：高台内蛇目釉剥	Ⅰ類：高台内5点目跡	Ⅱ類：高台端部釉剥	Ⅰ類：高台内5点目跡	Ⅱ類：高台端部釉剥	Ⅰ類：円形つば	Ⅱ類：花形つば
第1段階	H2	2																					1	
	H3	2				4											2		6		1(図)	2	3	
	H7					1														2				
第1または第2段階	H20											1												2
	H4																			1(図)				
	H18									1														
第2段階	H22		1				1	2				1		2										
	H5			3			1				1				1									
第3段階	H1				1				2															
	H6				1								1											
	H24				1																			
	H8										1					1		1						
	H10																	2						

表1 老虎洞窯址出土青瓷分類

梅瓶蓋		套盒		長頸瓶大	長頸瓶小	透かし彫り長頸瓶	弦文瓶	下蕪形瓶	梅瓶	觚	尊	鼎式炉	花盆	大盤	盤(径15以下)	蓮弁盤文	小皿	挟層碗	有蓋碗大	有蓋碗小	丸碗	小碗	蓮弁碗文	筆架
Ⅰ類:5点目跡	Ⅱ類:下端部釉剥	Ⅰ類:受部高	Ⅱ類:受部低	高台端部釉剥	高台端部釉剥	高台端部釉剥	高台端部釉剥	高台端部釉剥	高台端部釉剥	高台端部釉剥	高台端部釉剥	外底6点目跡	高台端部釉剥	高台内5点目跡	高台内5点目跡	高台端部釉剥	高台内5点目跡		高台内5点目跡	高台内5点目跡	高台端部釉剥	外底5点目跡	高台端部釉剥	
				3	1				4															
3	1	2		5	1(図)				4	3				2	1		1	3	1	7	1	1		1
													4											
							1				2	4									1			
	2	3						1								2							1	
						1																		
					1	1										1								
			1																					
																							1	
													1											
					1																1			

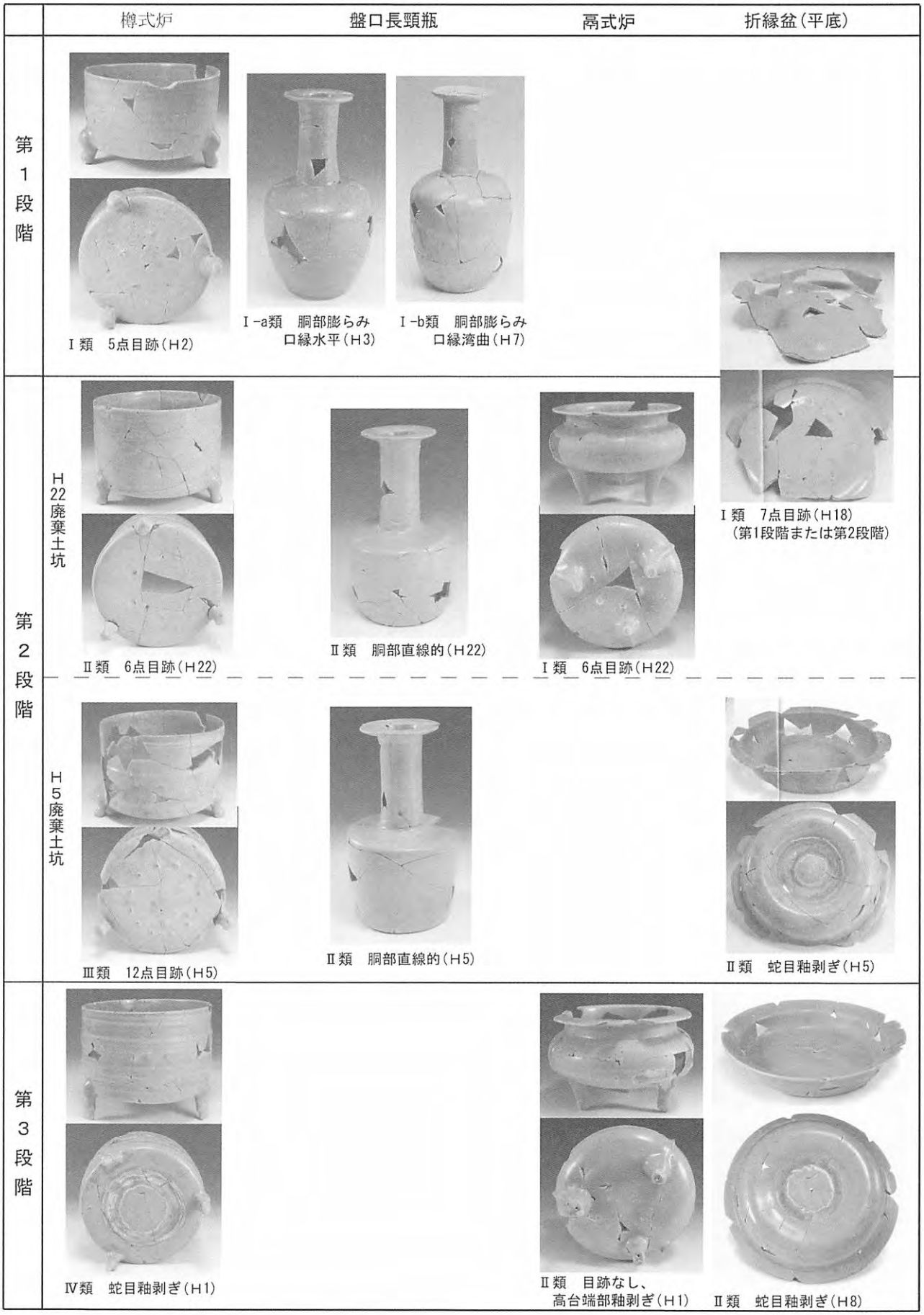
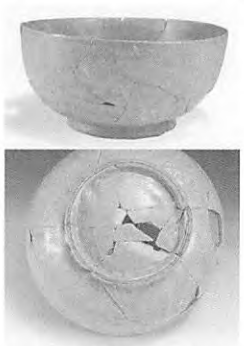
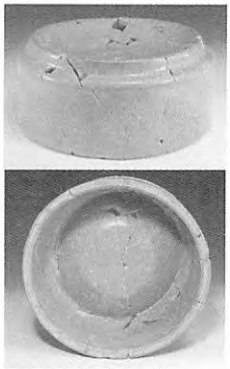
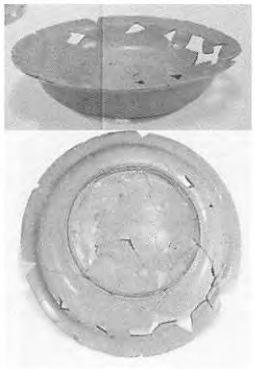
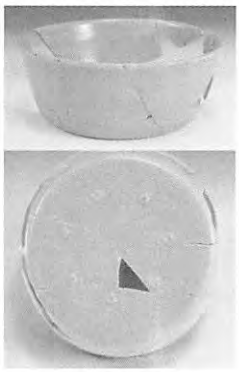
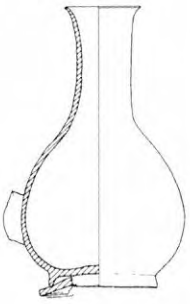
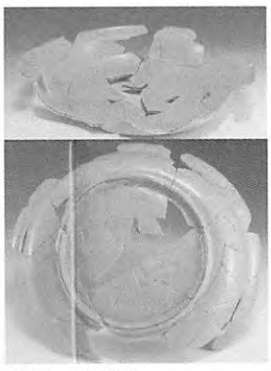
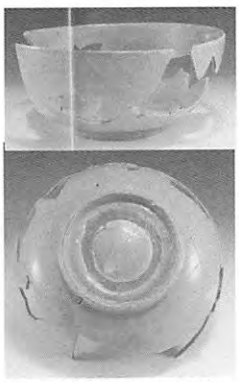
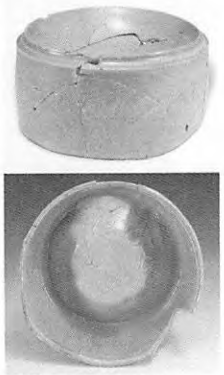


表2　老虎洞窯出土青瓷の器形変遷（第1段階～第3段階）

折縁盆(高台付)	洗	鉢	盒套	長頸瓶(小)
		 Ⅰ類　高台端部無釉(H3)	 Ⅰ類　受部大(H2)	(H22)
 Ⅰ類　7点目跡(H22)	 Ⅰ類　7点目跡(H22)			透かし彫り長頸瓶(H22)
	Ⅱ類　8点目跡(H5)			 (H5)
 Ⅱ類　目跡なし、高台端部釉剥ぎ(H6)	Ⅱ類　蛇目釉剥ぎ(H8)	 Ⅱ類　蛇目釉剥ぎ(H10)	 Ⅱ類　受部小(H1)	(H8)